

モダン／クラシック

「こんな夢を見た。

モダン（近代）の対義語としてクラシック（古代）を仮定。

モダン（現在）はクラシック（過去）がなければ成立しない。

つまりはクラシック（母）がモダン（子供）を生み出している。

やがて時代の流れと共に、モダン（今の流行）はクラシック（昔の流行）となる。

いつだって、クラシックはモダンが憎くて仕方ない。

しかし、モダンはいずれクラシックとなる。

堂々とめぐるモダンとクラシックの円環は途切れることはない。

途切れたいと思うのなら、断ち切るしかないだろう

母から伸びたへその緒を断ち切らねば、新しいものは生まれることは出来ない。

あるいは、母はへその緒を吸りたいのかもしれない。

吸って吸って吸い込んで、

ずるずる吸ったその先に、

へその緒つながる我が子のはらわた、

そのまま吸い付き食いたいのかも、しれない。

食うて食うて、クルクルと、

回る回るよ輪廻の円環。

へその緒つながりどこまでも、

ぐるぐる回った環状線、

抜け出したけりゃ、死なねばならぬ。

生まれておニューなモダンの娘、

母は古びたクラシック。

セピアとモノクロ交互に重なり、

色づく間もなく懐古の檻へ。

懐かしむ、懐かしむ。あの頃へ帰りたいと懐かしむ。

古びた写真を眺めては、

若いころを思い出す母と年老いた自らを憂う娘。

裏と表のモダンとクラシック。

母がおらねば娘はおれぬ。

されど、蚕で織った一つの紐は、

へその緒に似ているのかもしれない」

母↓娘（食ベタイホドニ愛シテル）

「こんな夢を見た。

母を殺し、子を殺し、母を焼き、子を焼き、子を産み、母を産み、子を育て、母を育て、母を食い、子を食い、母を食い、子を食う。

そして、また断頭台で首を落とさねばならぬのだ。そして、また磔台で肉を焼かねばならぬのだ。

二者が繋がり続ける限り、親子の愛憎が尽き果てることはないのかもしれない。

私が生まれ直すには、どうにか母を殺さねばならぬ。だから母をギロチンにかけるのだ。

私が生まれ直すには、どうにか娘を食わねばならぬ。だから娘をギロチンにかけるのだ。

処刑は、

首を落とされ焼かれると相場が決まっている。

母は娘が殺し、娘は母が殺すのだ。

へその緒はそのためにつながっている」

娘（断頭台）

「こんな夢を見た。

私の髪をおかっぱに、切って揃えた母さんが、手を引き階段上ってく。

——あそこに行かなきゃあならないのよ。と、優しく微笑む母が言う。

見上げた先には断頭台。

鈍色（にびいろ）刃がぬらりと光る。

そうか、私は私の首を捧げなけりゃあならないのか、と思った。」

娘（魔女狩り）

「こんな夢を見た。
食っている、食っている。

昨日母さん、磔に、あってその身を焼きました。

昨晚一晩母さんの、金切り声が響きます。

夜明けの声が、聞こえたら、母さん静かになりました。

静かになったら母さんの、焼けた匂いが漂って、

なんだかそれは、おいしそう。

とってもとってもおいしそう。

焼けた母の肉を食う。

母は焼かれて死んでいた。

こんがり焼けた母の肉から、

とっても美味しそうな匂いがしたから。

きつとそれはお乳の匂いなのだと思ったから、

私はおいしく、母を食った」

母（娘ノ面）

「こんな夢を見た。

この子の顔は何で私に似ているのかしら。

この子の顔は何で私に似たのかしら。

私はこんな顔だったかしら。

私はこんな顔だった。

この子の顔は私だった。

なんでこの子は私の顔をしているのだろう。

私はこの子を産んだのか？

私はこの子の母なのか？

私は紛れもなくこの子の母だろう。

では、私はこの子ではないのか。

殺して、顔を、剥いでみた。

しかし私には合わなかった。

なんで私に合わなかったのだろう。

いつなら私に似合ったのだろう」

母（再胎）

「こんな夢を見た。

げにいと美しき我が子を喰らう。

喰らう私は狂（くろお）ておるか。

この子を喰らえば、

私はこの子になれるのだろうか

なにゆえ、私はこの子を喰らう？

この子は私の血肉であろう。

ならば私は私の血肉、

この身に戻すだけのこと。

ああ、げに愛しき我が娘。

お前を食えば、私はまたお前を産むことができるのだろうか？」

娘（時代遅レ 三途ノ川ノ畔カラ）

「こんな夢を見た。

おぎゃあおぎゃあと泣いています。

お母さんが泣いている。

置いていかないでと泣いています。

うるさいなあ・・・。

いつもいつもお母さんはギャーギャーとうるさいのです。

うるさいから足蹴にして、私は私たちと遊ぶのです。

お母さんたちはお母さんたちでギャーギャーギャーわめいています。

喚いた先から蹴とばして、首をちぎって殺します。

もう、あなたの時代はないのだと、なんでそういうことがわからないのでしょうか？

あなたはもう、死んでいるのよ？

死語を吐きながら死後の世界を歩けばいい。

あ、でも私語は慎んだほうがいいと思う。

私語厳禁。あ、でも現金は六文錢ぐらいしか持っていないのね。

慎ましやかなお母さん、早く、死んでください」

母（臍ノ緒円環）

「こんな夢を見た。

また生まれた。

今度は母親だ。

また生まれてしまった。

前は娘だった気がする。

その前は？

その前はどうかだったか覚えていないけれど、少なくとも今回は母親らしい。

母親は嫌だ。

痛い目をしなきゃあいけない。

痛い目をしながら私を産まなきゃあいけない。

そうして新しい私は娘となって、また、私を産むのだろう。

私は産んで、娘になって、母親になってまた、産んで、また娘になって、また母親になって、死ぬのだ。

へその緒がある限り、私は母親で娘だ」